

鉢植えの文化論

INOMATA, Kazumi / 猪俣, 佳瑞美

(発行年 / Year)

2016-09-15

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第383号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013424>

法政大学審査学位論文の要約

鉢植えの文化論

猪俣 佳瑞美

要約

植木鉢や鉢植えは主に造園学、園芸学、植物学などの分野でなされる研究において取り上げられているが、植木鉢や鉢植えそのものが研究の中心に据えられることは滅多に無く、その存在が軽視または見過ごされてきたと言わざるを得ない。実際、植木鉢や鉢植えを象徴的に取り上げ、人文科学の視座から取り組んだ学際的研究に至っては、ほとんどなされていないのが現状である。しかし、鉢植えは現代社会に生きる人間の周辺に日常的に存在し、とりわけ都市生活者にとっては自然を感じさせる事物でもある。だからこそ筆者は、なぜ人は鉢植えを育て身近に置くのか、というシンプルな問いを立て、学術的な研究対象として取り上げることに意義を見出す。

本研究の目的は2つある。ひとつは、鉢植えが人との関係の中で発揮する機能を解きあかすことである。ふたつ目は、ひとつ目の目的と関連するが、鉢植えが表象として持ちうる内容を明らかにすることである。そのために本研究では、歴史考察と作品分析を行った。

第1部は「鉢植えの文化の歴史」と題し、まず古代ギリシャ神話に起源を持つ鉢植えを用いた祭式「アドニスの園」を取り上げた。本研究を貫く「未熟なもの」の表象としての鉢植えという解釈は、ドゥティエンヌによる祭式「アドニスの園」分析に依拠するものである。

「日本における鉢植えの文化」は、古代から近代まで通事的に取り上げた。古代から中世に関しては、古代中国における鉢植えの文化を概観することからはじめ、日本の鉢植えに関する最古の記録とされる『続日本後紀』に残る二寸の橘の鉢植えを考察した。この鉢植えは厳密には祥瑞として記録されていたわけではなかったが、珍しい自然現象と人間社会を関連づける天人相関思想からの影響がみられることを明らかにした。中世における鉢植えの文化に関しては、石の上で植物を育てる「盆山」と「鉢の木」が描かれた絵巻9場面を取り上げ、鉢植えが中世より誇示的消費の対象であったことを明示した。加えて、中世に盆山や鉢の木の管理を主に行っていた人々の中には被差別民とされた河原者も含まれていたことから、その経緯を探り、山水河原者が鉢植えの文化に関わるようになっていった背景を明らかにした。

「近世における鉢植え」では、江戸時代に流行した「奇品」とも呼ばれた変種植物と人々の関係を取り上げ、天人相関思想や祥瑞思想との関連の中で、珍しい植物に対する偏愛を考察した。人工交配が行われていなかった江戸時代に、鉢植えは培養環境を自由に変えることができる形態であるため、管理者があたかも全能で、植物の生が委ねられているという支配欲を満たす事物としても機能していたと考えられた。加えて、ヴェブレンによる誇示的消費を援用し、散財できる経済的余裕をもつ上層階級にとってのみ植木鉢は「誇示的容器」になり、自己顕示欲を満足させる事物として機能していたことを明らかにした。加えて「蛸作り」をはじめとする江戸時代特有の盆栽樹形の図譜を示し、その特徴と独自性を整理した。

明治時代は日本の西洋化に伴い、鉢植えが日本を代表する文化のひとつとして海外に出てゆき、国内では新しい価値観を定着させるため、政府によって家庭園芸が推奨された時代である。そこで日本が国として初参加したウィーン万国博覧会に展示された鉢植えを当時の写真を提示しながら考察し、少なくとも1873年の万国博覧会時点では、まだ「蛸作り」樹形

が作られ、日本を代表する鉢植えの文化として海外で展示されていたことを明らかにした。加えてパリ万国博覧会の報道用デッサンを分析し、鉢植えが私的空間の端に置かれることで番人と同様の機能を果たすことを指摘した。

次に「盆栽」が日本を代表する文化としてブランディングされていった経緯を、「盆栽」という漢字の読み方と、そこに影響を与えた支那趣味との関係を述べながら考察した。支那趣味を愛好する日本の文人に満足感を与えた「ぼんさい」という音読みの響きが、結果として、日本を代表する事物の呼び名となり、同じ事物を「鉢植え」や「植木」と訓読みすれば俗とし、「盆栽」と音読みすれば雅とするというスノビズムが、そこには明らかに生じていたことを指摘した。他方で、当時の日本で下層階級にいる人々が実際に行っていた鉢植えの楽しみ方は、アメリカの動物学者モースが来日中に書き留めたスケッチの中に残っていることを明示した。モースのデッサンは下層庶民の文化的レベルの高さを現代に伝える貴重な資料であるため詳細な分析を行い、モースが当時それぞれの鉢植えをどのように見ていたのか解明した。また、外国人向けの土産物として撮影された「横浜写真」をはじめとする古写真に、和装の女性の傍らに鉢植えが置かれている構図が多いことを指摘した。そして、両者が「未熟なもの」の表象という類似性の元、共に写真に収められている可能性を示した。

日本近代化において鉢植えに期待された機能は、明治政府が文明化にあたり導入した一夫一婦制や良妻賢母主義とも密接に関係していた。鉢植えを含む園芸は、女性が中心となって家族のために行うべき活動として推奨され、男性を盆栽に近づけた要因には、国家主義によって強まった家父長制度があり、盆栽造りを通して男性が一家における権力者である自分自身と天皇や将軍など盆栽を愛好した世の権力者を重ね合わせていた可能性を暗示した。

「現代社会における鉢植えの文化」は、まず現代社会において鉢植えが置かれている空間を室外と室内、公有地と私有地に分け考察した。室外としては路地に置かれた鉢植えが果たしている役割を考察し、室内としてはデンマークのオフィスで行われた人と植物の職場における関係を扱った調査結果をもとに、鉢植えの機能を分析した。考察にあたってはトゥアンの空間論を援用した。結果として鉢植えは、「空間」に価値を与え、見知らぬ「空間」を心地よい「場所」に変容させる触媒として機能し、水やりなどの手入れを要するため、安全性や安定性が感じられる「休止の場所」になりうるということが明らかになった。しかし、デンマークのオフィスで行われた調査を考察した結果、オフィスにおける鉢植えは安全な「場所」になるだけでなく、危険で不安定な「場所」にもなりうるということが明らかになった。現代社会においては模造植物の鉢植えも多用されているため考察対象として扱い、ビニール製の生きていない植物は「枯れない」ため、決して人を不安や恐怖に晒すことない「安心」で「安全」な事物であることに価値が見出されていることを明示した。

生きている植物を鉢植えで栽培するという行為の価値は、植物が生き物であるため全く同じ鉢植えが2つは存在しないこと、二次的喜びも期待できること、誰でも低予算で簡単に始められること等にあり、多彩な遊びの要素を鉢植えは網羅していることを明らかにした。

第2部「表象としての鉢植え」では、1章で、鉢植えが描かれている4作品、ローラン・ド・ラ・イール *Allegory of Grammar* (1650)、ウィリアム・ホガース *Tailpiece to the Catalogue of Pictures Exhibited in Spring Garden* (1761)、小田野直武「不忍池図」(1770年代)、ウィリア

ム・ホルマン・ハント *Isabella and the pot of Basil* (1867) を取り上げ作品から読み取ることができる鉢植えの含意を考察した。

2章「映画の中の鉢植え」では、鉢植えが単なる小道具ではなく表象として扱われている代表的映像作品として、『レオン』(1994)と、『誰も知らない』(2004)を取り上げた。『レオン』は、2人の登場人物と鉢植えの関係をドゥティエンヌによる「アドニスの園」分析に依拠しながら考察し、表象としての鉢植えが持つ6つの含意を明らかにした。『誰も知らない』に対しては、トゥアンの空間論と、ノイマンによる「女性=容器」という解釈を援用した。子どもたちと植物の関係は、コメニウスやルソーなどの教育思想にみられる「合自然の教育」における「植物類推」と、フレーベルが提案した「子どもたちのための庭」と呼ばれる教育理論にも依拠した。結果として、子どもが主人公をつとめる映像作品に鉢植えがしばしば登場する要因には、「子ども」と「鉢植え」が共に「世話を必要とするもの」の表象であり、全ての人間は子どもを経て大人になるため、鉢植えを世話する子どもたちは、他者によって世話されたい、他者から必要とされたいといった、いくつになっても存在し続ける欲望を再認識させる効果的な小道具として作品の中で機能している可能性を示した。

本研究が明らかにした鉢植えの機能は多岐にわたるが、全ての鉢植えに共有される含意には「生と死を内包する両義的なもの」があり、鉢植えは人為抜きには存在しないため、常に「人の気配を漂わせるもの」として認識されていた。加えて、鉢植えは「移動可能なもの」であり、それが「人の気配」が漂う主たる要因のひとつと考えられた。更に鉢植えは「世話・管理するもの」であり、この含意において、鉢植えは「庭の代用品」や、安全性の感じられる「休止の場所」になった。加えて鉢植えは「管理者の能力を他者に伝えるもの」や「教材」、所有者や管理者の「分身」にもなり、「分身としての鉢植え」は場合によっては「表象としての鉢植え」と読み替えることも可能であった。

本研究は、鉢植えが「財力・権威」「スノビズム」「自分・他者」「未熟さ・卑小さ」そして「儂さ」を表象するものとなりうることを明示した。そして、人が鉢植えを育て身近に置いているのは、鉢植えが活着しているからであり、人は、鉢植えが内包する「生」と「死」という両義性に、安心と緊張を感じているためと結論づけた。